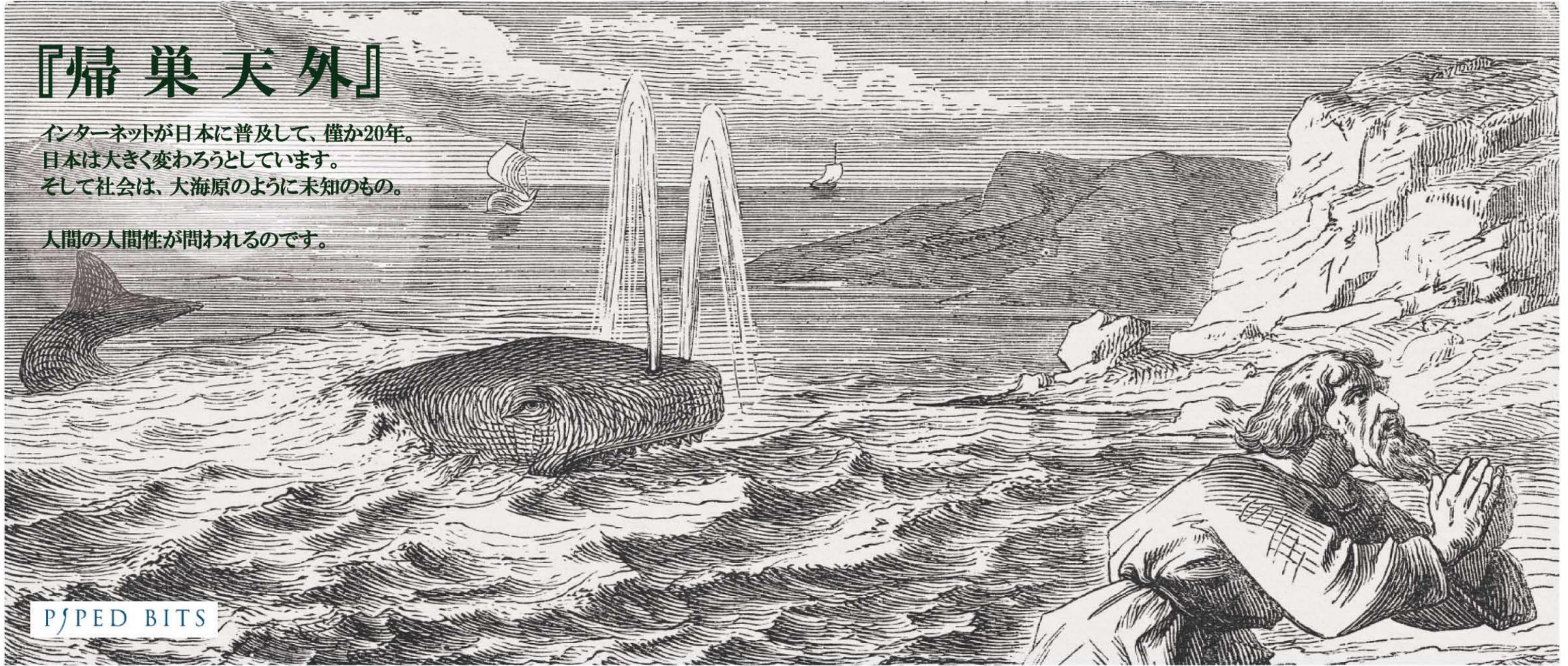


『帰巢天外』

インターネットが日本に普及して、僅か20年。
日本は大きく変わろうとしています。
そして社会は、大海原のように未知のもの。

人間の人間性が問われるのです。



PSPED BITS

『政府主導のイノベーション』

シンガポールの観光名所と言えば、世界三大がっかりの1つと評される「マリーライオン」が有名だが、3年前にその新たな主役が登場した。マリーライオンの対岸の埋め立て地に建設されたリゾートホテル「マリーナベイ・サンズ」は、57階建ての3棟の高層ホテルの屋上に船のような空中庭園が乗った斬新なデザインで、地上2000米の世界一高いプールからの絶景がテレビで繰り返し紹介されたことで、日本でもすっかりお馴染みだ。

印象深い姿形が特徴のマリーナベイ・サンズの建設には、以前このコラムで紹介した「BIM（ビム）」「ビルディング・インフォメーション・モデリング」の略」が活用されている。空中庭園にみられる曲面やねじりのデザインを合理的な工期とコストで建設するためにはBIMが必要不可欠だったようだ。

シンガポール政府は、建設業界に破壊的イノベーションを起こすことが期待されているBIMの普及に積極的だ。設計者に対して今後段階的にBIMの3次元データによる建築確認申請を義務付ける方針で、2013年は延床面積2万平米を超える建物の意匠部分、2014年には同規模の建物の構造と設備が義務化の対象になる。3年目の2015年には、延床面積5千平米以上の建物、つまり雑居ビル程度の規模にまで対象を拡げる見通しだ。

シンガポール政府は、この規制改革によって、シンガポール国内の建設業者の8割がBIMを導入することになり、その結果として建設業の生産性が大幅に向上することを目論んでいる。

まさに政府がリードするべきイノベーションの好例だ。建設業界は新たな技術の習得を迫られるが、技術革新に対する教育やインセンティブなどの政府の周到な配慮によって、反対の声は漏れ聞こえてこない。

一方、日本では、ごく一部の大学でしかBIMを教えていない。日本の建設業者はシンガポールなどの海外で受注した仕事を通してBIMの技術を習得している。このままでは、シンガポールで鍛えられた若者が日本国内の建設市場を席巻する日は遠くないかもしれない。

BIMの3次元データの提出を義務化すれば、今後、道路や建物が立て替えられる度に、自ずと都市の3次元データベースが整備されていく。将来は、都市全体の省エネルギーや防災、景観など、高度なスマートシティの基礎データとして活用されるようになるだろう。シンガポールは既にその壮大なプロジェクトのスタートを切っているのだ。日本のどこかの都市が1日も早くスタートが切れるように頑張らなければならぬ。



佐谷宣昭 Nobuaki Satani

1972年生まれ。九州大学工学部建築学科卒業。2000年九州大学大学院人間環境学専攻博士課程修了、博士（人間環境学）。翌月起業。株式会社パイプドビッツ社長CEO。明日の豊かな情報生活に貢献したいとの想いから、「情報資産の銀行」の必要性を説く。官公庁や都市銀行、小売業など3067の事業者向け情報資産プラットフォーム「スパイラル(R)」を提供中。

株式会社パイプドビッツ
東京都港区赤坂2丁目9番11号
03-5575-6601(代表) <http://www.pi-pe.co.jp/>